

書籍紹介



V. S. ラマチャンドラン(V.S.Ramachandran)[神経科学者]、
サンドラ・ブレイクスリー(Sandra Blakeslee)[サイエンスライター]
共著
山下篤子 訳
角川書店 1999.7.30初版, 2005.2.5 第12版発行

『脳のなかの幽霊』



神経科学の本である(原題は“PHANTOMS IN THE BRAIN”)。本書(日本語訳)初版が発行されたのは今から15年以上前。論考の数々が大変興味深いものだったので紹介する。神経学のようにいまだ(本書刊行時)揺籃期にある科学分野においては一例の実験から始めて症例を増やし、得られた所見を確かめることが、多数の患者を統計的に分析するよりも有益だと神経内科医の著者ラマチャンドランは語る。

本書の概要は、オリヴァー・サックスが寄せた「序」(第9—13ページ)、「はじめに」(特に、第22ページ)、「訳者あとがき」(第326—328ページ)及び養老孟司による「解説」(第329—333ページ)を読めば掴めるが、全十二章からなる本編だけでなく、横書きの「原註」(巻末第20—71ページ)まで含めて面白い(興味深いという意味合いだけでなく、可笑しいという意味での面白さも含まれている。「解説」にも「ときどき声を出して笑ってしまうので、珍しく(電車の中でなく)自室で読み終えた」とある)。

各章は、著者が臨床で遭遇した神経疾患の患者の奇妙な症状を紹介し、その症状を手懸りに、人間の脳の仕組みや働きを論考していく構成になっている。例えば、「第三章 幻を追う」では、とうに切断された手足がまだあると感じる「幻肢」を取り上げている。本書刊行の二十余年前に発行された、関根庄一編著『翼は心につけて』(1977年初版、翌年に同名の映画が公開)。骨肉腫で亡くなった15歳の少女・鈴木亜里の記録だが、この実録の第77ページに「幻覚」とあり、(亜里は右肩に骨肉腫が発見され、右腕を手術で切断した。その術後)「右手をなくしたはずなのに、なくなった右手が動く。……右腕が上ったまま下りない。……看護婦が、……ほうたいの上から、あるはずの箇所をさすってくれる。」(一部省略)と記載されている。この「幻覚」が本書という「幻肢」に当たると考えられる。

幻肢を動かすために用いたのが「バーチャルリアリティ・ボックス」。鏡を設置した箱(ふたを除去した段ボール箱

のまん中に鏡を立て、鏡の両側の箱の壁面に片手をさしこめるような穴が一つずつ開けられている。患者はその穴から正常な手と幻の手をさしこむ。)という単純な装置を使って、患者に、鏡に映った正常な手の像を見て、それを少し動かし、感じている幻の手の位置と重なるようにしてくださいと頼む。すると、実際は正常な手とその鏡像を見ているだけなのだが、両手が見えているような錯覚が起こり、幻肢から感じていた苦痛から解放されるという。因みに、栗本慎一郎が著した『脳梗塞になったらあなたははどうする』(2000年初版)では独自の工夫が加えられ(同書第186—191ページ。「栗本式鏡箱」)、幻肢ではなく麻痺肢に対しても有効であった旨述べられている。

このほか、半側空間無視や鏡失認(第六章 鏡のむこうに)、自分の体の一部を他人のものだと主張する自己身体否認についての考察や、左脳が一貫性のある信念体系(モデル)を作って現状維持を図るのに対し、右脳は異常や矛盾を検出し、それがある閾値に達するとモデル全体の改変を強行するという説(第七章 片手が鳴る音)、近親者を本人と認めず偽者だと主張するカプグラ・シンドローム(第八章 存在の耐えられない類似)、側頭葉と信仰(宗教一神)との関係についての論考(第九章 神と大脳辺縁系)等が続く。そして、最終章では脳のニューロンの活動から、どのようにして「赤い」とか「冷たい」といった主観的世界の感覚が生まれるのかというクオリア問題も取り上げている(第十二章 火星人は赤を見るか)。

本編最後の一文「しかし問題を提起できるということそのものが、私たちの存在のもっとも謎めいた局面だと私は思う。」も味わい深い。

なお、本書の後に『脳のなかの幽霊、ふたたび』が発行されている(2005.7.30初版)。こちらの原題は“THE EMERGING MIND”である。(以上、敬称略)

紹介者 審査第二部 福祉機器 鈴木 洋昭